

井上英明先生を送る惜別の辞

古田島洋介

平成四年四月に青梅校が開学して以来、日本文化学部において常に重責を担っていらつしやつた井上英明先生が、平成十九年三月末日を以て定年退職をお迎へになる。その長年にわたる御労苦に対し、僭越ながら日本文化学部を代表して茲に衷心より感謝の意を述べるとともに、些少の字句を書き留め、以て井上先生をお送りする言葉としたい。

井上先生は、早稲田大学大学院日本文学専修博士課程を御修了後、ニュージーランドのオークランド大学、イギリスのロンドン大学、そして梅光女学院大学を経て、昭和六十年から明星大学に奉職なさつた。主たる御専攻は平安朝和文学だが、御経歴から察せられるとほり海外教学経験の豊富な国際派の学者で、狭い殻に閉ぢこもる国文学者の通弊とは無縁の方である。『源氏物語』その他を英語で自在に語ることでできる稀有な御存在、そのうへロンドン大学終身雇用教師の資格をもお持ちとなれば、もはや贅言を費やす必要はないだらう。『マオリ神話』（昭和五十七年）『異文化時代の国語と国文学』（平成二年）『列島の古代文学』（平成十六年）などの単行本のほか、多数の論文・翻訳・書評を執筆なさつ

てきた。平安朝和文学の研究者がマオリ神話を翻訳する——この一寸見には突拍子もない組み合わせだが、井上先生にあつては何らの引つ掛かりもなく自然に実現されたのである。

平成四年、日本文化学部・情報学部の二学部を擁する青梅校が開設されるに当たり、井上先生は日本文化学部の設置に関する責任者をお務めになつた。そのときの並々ならぬ御苦勞は折に触れて伺つてゐるが、私個人としては初対面のときの印象が今でも強く残つてゐる。日本文化学部の開設を見越して、私は平成二年から明星大学に奉職することになつた。平成元年の一夕、私を御紹介くださった小堀桂一郎先生（平成十六年三月定年退職）に同道して某レストランに着くと、すでに井上先生と岡田皓一先生（平成十八年三月定年退職）がお待ちになつてゐる。食事の席での面談とはいへ実質は面接試験であるから、私としては少し緊張してゐたのだが、井上先生はビールを飲みつつざつづくらんにお話くださり、実に愉快な一時だつた。そして、帰り際、手洗ひに行つた井上先生をエレベーターの前でお待ちしてゐると、大きな声で「あれ？みんなはオシッコすませたの？」と言ひながら井上先生がもどつてきた。一瞬、周囲の人々の視線が集まるような大声だつたので、可笑しいやら恥づかしいやら、「このやうな方ならば御一緒しても大丈夫だらう」と安堵したものである。何とも飾らぬ気さくな方との印象だつた。

いざ青梅校が開学すれば、日本文化学部の運営は、開学に至つた経緯を知悉してゐる井上先生に頼るしかない。結局、平成四年度から十一年度までの八年間、井上先生に学部長を務めていただいた。当初の四年間は言語文化学科主任をも兼ねていらつしやつたのであるから、その激務については言ふまでもないだらう。想へば、学部の全教員が井上先生に甘えてゐたと称しても過言ではあるまい。

学部長としての井上先生の基本方針は、一貫して明快だった。「自身の研究を基盤として、学生の教育に当たってほしい」。学究たることの矜持を崩さぬ井上先生にとつて、これは当然すぎるほど当然の方針である。海外の学会での研究発表を奨励し、常に研究論文の執筆を促してくだされた。実際、開学から一年後、平成五年には言語文化学科の紀要が創刊され、平成十年からは井上先生を刊行責任者に載いて言語文化学科・生活芸術学科（現・造形芸術学部）の二学科による共同研究論集も刊行が開始された。毎年、紀要に加へて研究論集、しかも締切日がほぼ同時期となれば、それだけ教員にも負担がかかる。しかし、「大学から研究費を支給されてる以上、教員が研究論文を執筆するのは当然のこと」といふのが、井上先生の譲らぬ持論だった。以来、紀要も研究論集も順調に発行され、この平成十九年三月を以て、紀要は第十五号、研究論集は第十輯が刊行される。かうした研究論文執筆の雰囲気を支へたのは、紛れもなく井上先生の采配であつた。研究論文を稀にしか執筆しようとしぬ教員に対し、時として厳しい態度をお取りになつたのも、井上先生としては確乎たる御信条から出た義憤の現れであつたのだらう。

多弁にして能弁、学生を孫のやうにいとほしむ井上先生は、学生たちの人気を博してゐた。失礼にも陰で「可愛いおぢいちゃん」などと称しつつ井上先生に親しみ、卒業論文の指導をお願いしてゐた女子学生も少なくはなかつた。細かいことはうるさく言はず、請はれば親身に相談に乗り、煩を厭はず学生の文章を添削する。かうした井上先生が学生たちから信頼されてゐたことと言ふまでもない。

さすがに長きにわたる御苦勞が響いたのか、ここ数年間は時をり御体調を崩される場面もあつた。もつとも、「ちよつと心臓を悪くしてね」と言ひながら、御退院直後に両切りショートピースを平氣でお吸ひにな

つてゐたことすらあるのだから、磊落ぶりは相変はずでいらつしやつた。「どうせ年を取れば大学者もチンピラ学者も同じ、主治医がどうかうの、そんな話ばかりするやうになるんだから」と大笑ひなさる。いつでも井上先生の周囲には賑やかで明るい雰囲気は漂つてゐた。

井上先生のお姿が見えなくなるのは、淋しいかぎりである。今後、少なくとも数年間は「井上先生がゐてくだされば」といふ場面が連続することだらう。後を継ぐ者としては、井上先生がお築きになつた学部の雰囲気を持し、さらに発展させるやう努めてゆくしかない。その御存在の大きさに改めて畏敬の念を抱くとともに、退職後の御安寧を切にお祈りするしだいである。